経験のない宙吊りに耐える知性と自ら答えを見つけようとする意志 依存性からの脱却へめざめの時期

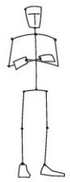
一歩先のあなたへ

永田 和宏

1 答えは……、ない

勉強には試験がつきものである。勉強の成果は試験の点数で計られる。せっかく勉強したのであるから、いい点数をとりたいが、そのためには正しい答えに辿りつかなければならない。しかし、この「正しい答え」というのがなかなか曲者である。そこではまず「正しい答え」があるということが前提となっている。あらかじめ用意された答えがあって、誰が解いてもそのひとつの答えに到達できるようになっている。試験とはそういうものだ。A君の答えとB君の答えは違っているのだが、どちらも正しい、ということは、入学試験などではまずあり得ない。入学試験で、解答が二つあったり、答えに辿り着けなかったりする問題があると、たちまち新聞沙汰になる。大学の責任者が頭をさげて謝罪することになりかねない。

答えは確かに〈ある〉。それが前提である。そして先生はその答えを知っている。その正しい答えに、どうしたら自分たちも到達できるだろうか。先生が知っているはずの答えと自分のものが一致すれば正解で、違っていればバツ。それが入学試験も含めて、高校までの試験の問題であった。



考えてみると、これは怖いことではないか。なぜなら、小学校から高校まで、誰もが一貫して、問題には答えが必ず一つあるものと思い込んできたのだから。教師の側も、答えが二つも三つもある問題は避けてきただろうし、答えのない問題は出しようがなかった。

これはやむを得ないことである。しかし、実社会に出て、そのような答えのある〈問題〉というのは、実はほとんどないと言ってよい。

たとえば『広辞苑』は、「問題」に四つの意味を載せている。①「問いかけて答えをさせる題。解答を要する問」、②「研究・論議して解決すべき事柄」、③「争論の材料となる事件。面倒な事件」、④「人々の注目を集めている(集めてしかるべき)こと」の四つである。このうち、答えがあるものは①だけ。そして、実社会での問題と言えば、②～④までどれをとっても、それには答えがない。

たとえば日本と中国がしのぎを削っている尖閣諸島の「問題」。これに絶対正しい解答を与えられる人は、おそらく誰もいない。正しい解答というそのものがないのである。私たちは、そんな社会に暮らしているし、若者たちは、大学を出れば、そのような社会のなかで生活をしなければならなくなる。

問題には一つの答えがあるものだと思ってきた教育と、何一つ絶対的な答えというものがない実社会とのあいだに、バッファー（緩衝帯）が必要だと私は思っている。大学の大切な役割の一つは、高校までの教育と実社会とのあいだのバッファーとしての役割である。高校を卒業して社会にでる人も多いわけであり、ほんとうは高校にもそのような役割があってほしいとは思っているが、少なくとも大学には、そのような役割は必須のものだと私は思う。

問いがあって答えがないという、それまでに経験したことのない宙づり状態に耐える知性。答えがないということを前提に、なんとか自分なりの答えを見つけようとする意志。それにめざめさせるのが、大学の4年間であり、その責務である。誰かに尋ねれば、必ず答えがあるはずだ、与えてくれるはずだという依存性から脱却する必要がある。

文部科学省は大学の質保証ということを頻りに言っている。質とはどれだけの情報を詰め込むかではなく、社会にはある問題はないのだと、まず認識させることにあるように私には思われる。

芽生え

1947年、滋賀県生まれ。京都大理学部卒業。京大再生医科学研究所を経て、現在は京都産業大総合生命科学部教授。歌人で、短歌結社「塔」主宰。

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます